九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九人研のあゆみを思う ： 創立30周年を祝って

江淵, 一公
放送大学 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2338948

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.9-12, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

九人研のあゆみを思う—創立30周年を祝って—

江淵　一公
（放送大学教授）

九州人類学研究会創立30周年、誠におめでとうございます。創立初期から九人研と深く関わってきた一人として感慨無量です。最近の私は福岡を離れていることもあって、研究会例会には出席する機会がないままに過ぎていますが、事務局からいただくお知らせと会報を通じて、九人研が堅実なあゆみを続けていることを大変嬉しく思っています。「継続は力なり」という言葉がありますが、まさにその通りであると、九人研の過ぎ来し方を振り返りながら、感銘を受けている次第です。九人研は、例会の記録で

ある年報を殆ど毎年欠かすことなく刊行し続けてきた、日本民族学会の地区研究会のなかでは希有の存在です。創立30周年記念号が刊行されるというのも、そうした実績があってはじめて可能になったことと言えましょう。

私は九人研が設立された1971年はアメリカ滞在中で、設立に直接タッチはしていませんが、当時九州大学教育学部の助手をしておられた小野澤正喜氏から相談の連絡を受けていましたし、2年目を迎えた1972年、帰国早々に創立者であり初代会長の綾部恒雄先生からアメリカ調査の報告を求められたのが最初の関わりでした。アメリカではピッツバーグ大学人類学部に1年ほど籍を置き、マキスポートという小都市のある黒人の家に住み込んで「黒人のエスニシティとは何か」をテーマにフィールドワークを行ったのですが、その成果の一部を発表させて頂き、その要約を年報の創刊号に収録して頂いたことも忘れ得ぬ思い出となっています。当時の私は福岡教育大学が本務校でしたが、九大教育学部の非常勤講師として文化人類学概論など人類学関係の授業を担当していたこともあって、以後、九人研の例会担当の運営委員として、2ヶ月に1回程度の頻度で開催される例会の講演者を探し依頼する仕事を長く続けることになりました。そして、1980年に綾部先生が九大から筑波大へ転出された後を承けて第二代会長に就任し、その後8年間、広島大学への異動で福岡を離れるまで、会のお世話をさせて頂きました。広島へ移った年、そして6年後に九大へ戻り定年退官の年を迎えたとき、総会で記念講演をさせていただいたことも懐かしい思い出です。

すでにどなたか他の寄稿者が書いておられるかもしれませんが、30周年を迎えたこの機会に、九人研の設立のころを振り返って思い出すことをいくつか記してみたいと思います。

九州地区の人類学研究者の連携組織としての九人研の設立の中心となった九州大学には、その〝母胎〟というか〝前身〟といえるような組織が存在していました。「ESA」(Ethnology, Sociology and Anthropology の略称)というのがそれです。これは私の院生時代(1956〜61年)のことなので、随分古い話になります。私が大学院に進学した頃は、「文化人類学」と銘打った授業を開講していたのは教育学部だけで、当時教育学部附属比較教育文化研究施設(略称「比研」)に所属しておられた吉田禎吾先生が、お一人で担当なさっていました(のちに綾部先生が専任講師として赴任されました)。しかし実は他学部にも、文化人類学という名の授業科目こそありませんでしたが、実質的に文化人類学と関係の深い研究をなさっていた先生方が何人もおられました。例えば、文学部社会学講座の喜多野清一教授や内藤莞爾助教授、宗教学講座の古野清人教授や野村暢清助教授、法学部の民法・家族法講座の青山道夫教授や有地亨助教授、医学部の解剖学講座の金関丈夫教授や永井昌文助教授といった、錚々たる顔ぶれでした(職名はいずれも当時)。ESA 会は吉田先生を中心に、比較的若手の先生方(当時の助教授クラスの先生方)を主要メンバーとして、それに教育学部の社会心理学の三隅二不二助教授(当時)や教育哲学の石井次郎助教授(当時)などが参加されてスタートした人類学談話会のようなものでした(教授クラスの先生方の中には、ESA 会がスタートした頃には既に他大学へ転出されたり退官された方もあったように記憶しています)。ESA の例会には各学部の院生も人類学に関心のある者は傍聴を許されていましたが、この例会への参加をきっかけにして、学部・研究科を異にする院生・学部生の間で交流が盛んになっ

たことも懐かしい思い出です。このESAの特筆すべき点の一つは、話題提供されるテーマが文化人類学や社会人類学だけでなく、社会学、宗教学、社会心理学、形質人類学など、隣接分野まで幅広い範囲に及んでいたことです。

このESAが、学部を超えた人類学研究者の繋がりを創り出すことによって九大の人類学研究の基礎を培ったことは疑いなく、その意義は非常に大きいものがあったと思います。ESAは、1969年、吉田先生が東大へ転出されたあと、九人研へ発展的解消を遂げることになります。九人研は、吉田先生が築かれたそうした基盤の上に、それをさらに発展させて、九大だけでなく九州地区の各大学の人類学研究者の連携組織として設立されたものですが、それをリードされたのは綾部先生でした。私が九人研の例会担当運営委員を仰せつかったとき、綾部先生が講演者の人選に際しては、文化人類学だけに片寄らないように、できるだけ形質(自然)人類学の分野の研究者も含めるように目配りして欲しいと言われたことを覚えていますが、九人研が「九州文化人類学研究会」ではなく「九州人類学研究会」と名乗ったのは決して偶然ではなく、ここにはESAの〝伝統〟が生きているのです。実際問題としては、九州地区内で講演者に自然や形質の分野の研究者を求めることは必ずしも容易ではなく、遺憾ながらこの〝伝統〟はその後は次第に希薄化していった観がありますが、それには文化人類学研究の専門的分化が進み〝総合人類学〟的対話が難しくなってきたことが関与しているのかもしれません。

最後に、私が会長時代に遭遇した九人研の〝危機〟について簡単に触れておきたいと思います。青木保氏が日本民族学会会長に選任されたときのことですが、たまたま私は九州地区から理事に選出され、青木会長の要請で学会の「地区研究会担当理事」を引き受けることになりました。ところが、皮肉なことに、当時の学会は財政難に苦しみ、何とかして支出を抑えることに腐心していた時期にあり、その支出抑制の矛先が地区研究会に向けられることになったのです。いま手元に当時の資料がないので、正確な時期や内容を述べることはできないのですが、地区研究会に対する学会補助金はそれまでは一律だったのが、今後は会員数に応じてきめるという案が打ち出されたのです。この案通りに進むと、九人研への割当額は大幅減額となることがわかったので、私は学会の地区研究会担当理事でありながら、このときばかりは九人研の会長という立場から、減額率を少しでも低くして貰うようにお願いするという皮肉な巡り合わせになってしまいました。私が〝防戦〟のための理由として主張したのは、九州地区は人数こそ多いとは言えないものの、古い歴史を持ち年報を出している唯一の地区研究会であること、その実績はこれまでの理事会でもつねに評価されてきたことなどを事務局や他の理事に訴え理解して頂くことでした。しかしながら、この〝作戦〟は失敗に終わりました。地区研究会補助金は講演謝金補助目的であって、会報の刊行助成のためではないと、事務局から反発され、逆効果を招いてしまったのです。私は、このときの〝敗戦〟を九人研の総会でどう報告したものかと苦慮していました。ところが、有り難いことに、当時の会員の方々は寛容で、そのことを報告した年次総会では、民族学会の台所事情も分かるからと私を逆に慰めてくださり、発表者には少ない講演謝金で我慢してもらってできるだけ刊行費に回し、自助努力で会報の刊行を続けようとの決意表明がなされたのです。その言葉通りに、会報の刊行はその後も途切れることなく続き、今日に至っています。九人研を

支える皆さんの誠実な努力を物語るものと感無量です。この30年の実績を貴重な遺産として、九人研が今後も堅実な発展を遂げ、九州の人類学研究の水準向上に貢献することを心から願っています。